

# 信州読書会 ツイキャス読書会

## 課題図書 武者小路実篤『愛の死』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。  
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 36 回のツイキャス読書会の課題図書は、武者小路実篤の『愛の死』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

## 武者小路実篤 『愛と死』 読書感想文

寺田農さんの朗読を聴いて感想文を書きました。恥ずかしながら武者小路実篤の作品に触れたのは今回が初めてでした。

主人公の村岡と夏子、野々村との掛け合い、手紙のやり取りがとても面白く、何度も笑ってしまいました。

夏子は運動神経も芸術も、文才も優しさも兼ね備えた女性だと思いました。野々村はインターネットもない時代に「西洋に行かなくと分かる」と言いましたが、それはものすごい量の知識があるからだとも思いました。

村岡がヨーロッパの各地で様々な芸術に触れた描写も素晴らしかった。だけどその中で東洋、日本の文化もまた素晴らしいと感じた点は少ないながらも海外に行って日本人以外の国の人々と交流した経験のある自分にも共感できました。

この作品と同様に愛する人が自分より先に逝ってしまったら自分はなかなか受け入れず泣いてばかりで何も手につかずにいるんだろうけど、逆に自分が先に死んだら泣くのは初めの日くらいにして、あとはしっかり生きてほしいと勝手ながら思っています。

あの世でまた会えるとか、また復活するとか、生まれ変わってまた一緒になるとか思うのは難しいですが、縫うのとはまた違って、思いを胸に抱いて前を向いて生きているうちは生きる。という答えくらいしか今の自分には見当たりません。生きてるうちにまずはしっかりみんなを愛したいと思います。

(おわり)

## 「愛と死」の感想文

武者小路実篤の「愛と死」を初めて読んだ。同じ作者の「友情」は昨年ツイキャス読書会で読んだ。本作と「友情」は作品の雰囲気似ており、続編、姉妹編と言ってもよさそうだが、両作品に 20 年の隔たりがあることにまず驚いた。

また、本作は戦争に突き進んでいく時代の、文芸統制が行われ始めた中での発表であったとのことだが、一読した限りではそれほど表現が抑圧されているようには窺えない。また、これから戦争に突き進んでいくような危うさ、過激さといった雰囲気は登場人物たちからは感じられない。

作品の前半では夏子のおてんばぶりが生き生きと描かれている。また、中盤には恋人同士になった村岡と夏子の手紙を通してお互いの愛を確かめ合う二人の熱情がありありと描かれている。それだけに病気一つしたことがなかった夏子が、村岡の帰国の直前に流行したスペイン風邪でこんなにも簡単に病死してしまうことに、村岡や夏子の兄野々村といった登場人物たちとともに読んでいる自分も穴の空いたような喪失感を感じてしまう。

最後の村岡の演説は夏子を奪っていった死神に対する復讐心と、今後、生きている人間のために働いていくという決意の表明であった。しかし、言葉を尽くしても夏子を失った哀しみは消えない。

「友情」の感想文で「百年の年月を感じさせない」と書いたが、本作を読んで、現代を生きる私の感受性が作者を含めた過去の人々から影響を受け、引き継がれているのだとも感じた。

(おわり)

## 『昭和の世界の中心で愛を叫ぶ』

今回の『愛と死』ですが、途中のラブラブ書簡のやりとりは甘ったるくて、読んでいるこちらが恥ずかしく感じてしまい、もう勘弁して下さいと思ってしまいました。

夏子の手紙も『あなたのおまえより』から『妻』に代わっていくので、僕だったら、本当にこの人でいいのだろうか？と、逆に憂鬱になってしまいそうです。

ただ、夏子は、結婚する前に亡くなってしまったので、この『妻』という一字の重さがあとにフックになるんですね。

村岡と夏子の愛情は増すばかりで、他者が介入する余地がないほど二人が愛し合っていたせいなのか、夏子が料理の勉強がてら、神様の育てていた禁断の実を、おいしく食べてしまって天罰が下ってしまったのでしょうか。

貴い人というのは、神様が欲しがるとも言えるかもしれませんよね。

いい人は早く亡くなるとか言うように。

130 ページの夏子の部屋に入った村岡に夏子が「いい子、私のためにそんなにお泣きになるもんじゃありません。お元気になるして下さい」と囁く場面がありますよね。

僕はこういうシーンが、泣きそうになってしまうので、泣かそうとする動物映画と同じで苦手だったりします。

恥ずかしながら、僕には映画のセカチューを一人で観に行つて泣いた黒歴史があります。

村岡は、46 歳になっても婚約者であったであろう夏子の存在を忘れないであげられたことは、生きている者が唯一、死者に対して弔らえることだと思いました。

やはり、野々村さんは最初と最後の挨拶も素晴らしかったので、僕の脳内ではイケメンお兄さんでした。

昭和 14 年に発表された作品だそうですが、仮に村岡と夏子が結婚していても、後に戦争が待っているのです、生きるっていうのはやはり死ぬより大変だなと思いました。

村岡の「生き残っていた以上、僕は何かをします」という力強い言葉は、1 日 1 日を無駄に過ごしがちな自分に鞭を打ってもらった気がします。

(おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

## 愛と死 武者小路実篤 読書感想文

人生に死が与えられていることはあまりにも残酷なことだと思った。殊に若い人間が死んでゆくのは。

「愛と死」が発表された昭和初期、盧溝橋事件があった。上海事変があった。ノモンハン事件があった。従軍作家として名だたる文学者も戦地に飛ばされ、戦場を文章で伝えるよう強要されている。文学と戯曲と芸術を愛する作家にとって自由に書けない苦しい時代背景がある。

文学を圧殺しようとする軍国主義の暴力にたいして、作者が精一杯のレジスタンスを行った作品だった、と解説にあるように 54 歳の作家は、少年少女までが従軍させられ、あつけなく命を落とすことにやるせない痛みを感じていたろうと思う。

話の前半は、若い二人の恋が人生の最大の喜びとして描かれており、そしてぷつぷつと「死」が二人の幸せを奪う。不可抗力の別れは、戦地へ飛び込んで尊い命を擲つ人生のはかなさに、なにか抵抗したい気持ちが表れているように感じた。自然の意志による愛の美しさとコントラストに唐突な死を描いたのは、ふつふつとした権力への怒りがあつたろうと思う。

天機もらすべからず。と夏子の台詞にあるが市井の個人は、たとえ作家であっても本当の気持ちは言えないのだった。読み終えて、泣きじゃくる主人公につられて涙が落ちるが、全編どこかしら明るさを保っているのは、白樺派の自然主義的人間肯定、人生賛歌でもあるが、戦時下で作品を発表する際の意図したことだったと想像する。

人生は無常だ。

だからこそ、夏子への愛、また母からの愛、野々村との深い友情を描き、自由主義をつらぬく姿勢を示した。我々は日々一歩ずつ死へ向かっている。恋人の死は辛いけれど、恋も愛もなくては、なんのために生きているのかと武者小路先生は問う。ただ先生、後半は村岡を泣かせすぎじゃありませんか？

淋しさの谷、涙の谷をさまよわぬものは、人生を知ることすくなし。

泣き虫なのは、先生のことだった。

泣きながら読む文学がある向こう側に、泣きながら書く文学があるのだとはじめて知った。

(おわり)

## さようならよりもこんにちは

小説家の村岡は、同じく小説家である友人野々村の誕生日会で、自分に回ってきた余興を野々村の妹夏子に救われ、恋をする。夏子の方も村岡の小説を読んでおり、意気投合した末、村岡がパリから帰ってきたら結婚しようとして夏子と約束する。しかし帰りの船で電報が入り、彼女の病死を知る。突然の死に村岡は泣き崩れるも、周りの生きている人たちの助けを借りながらも立ち上がり、愛する人を殺した自然に立ち向かおうとする物語。

「之は二十一年前の話である。しかし自分は今でも忘れることは出来ない」 (p.103)

時が忘れさせてくれるというのは何だ。風化されないまま、悲しみは心に刻まれたままだ。しかし村岡は、婚約者を失った自分の悲しみよりも、若くして死んだ相手の死を悼む。

映画やドラマで恋人や愛する人の死を取り上げる中で、焦点を当てられるのは、後に残された者の悲しみに同情させることが多い気がする。残された者には、いつまでも相手の死を忘れないことが美德と植え付ける。

村岡は、死んだ者に何をするかではなく、生きた人間のために働くことが唯一できることだと言う。パリに行っても何も変わらない。婚約者の死を通して自分が宙返りするほどの衝撃を受ける。まるで夏子の死以前が幻想で、死後が現実のよう。

生きた人間のために働くこととはなにか。

村岡がパリから帰ってきて歓迎会をすることになったとき、野々村の母は生まれる子を見に、自分のもう一人の息子の家へ行っていた。娘の婚約者の歓迎会で娘の死を悼む空気になるよりも、これから生まれる息子の子に会いに行く選択。これこそが生きた人間のために働いていることだと言える。

愛する人が死んで、わんわん泣いたら、新しい何かに出会えるのがいいだろう。生きている者は死んだ者に対して無力だろうから。もしかしたらどこかで見ている愛する人が、自分がこの世で楽しくしているのを、微笑ましく見守ってくれているかもしれない。嫉妬なんてしない。そういう人だから愛しているのだ。

(おわり)

## 『愛と死』 読書感想文

「野々村が自分に厚意を持ちすぎている事が話の起こる一つの原因」とあるように、世評のよくない村岡の作品を野々村は天の邪鬼からか、高評価します。野々村の妹夏子は兄に強く影響され、村岡のよい読者になります。村岡はコンプレックスから、出会って2～3年間は夏子を高嶺の花だと思い意識しないようにします。

お辞儀ひとつ自然に振る舞えない異性に対する村岡の不器用さや卑屈さがとても上手に書けていると思いました。

目的がいまいち、はっきりしない村岡の巴里旅行。一応村岡の叔父さんが何の為なのか夏子と引き離すという設定だったけど、うやむやになっています。

「世界の下らないことを知ってもらいたい」と野々村の贈る言葉ですが以前「他人の長所を認めない事で無理に自信をつくらうとするのは酷い」という随筆を書いたのに！とってしまいました。「私は帰るためにゆくような人間なのです」と村岡。なかなか意味深ですが普通にポカーンとしてしまいました。

裏設定ではやっぱり、恋愛感情がマックスの時ふたりを引き離し夏子を理想の妹&恋人として保つためなのかなと思いました。

死んだものは、もうあらゆることから解放されたものなので妹は不幸でも悲しんでもいないと思っている、死というものに腹を立て悲しむのは生き残った者だけの心理だと、野々村はきっぱり言い切ります。

村岡は、死んだものは生きているものに影響を及ぼすが、生きているものが死んだものに対して無力なのを感じ、人間が無常であるということも同時に思い知ります。

残された人間も死んだ人間と同様に「無心に成り切る」という信念を実現し慰めにする、それより他仕方がないのではないか。と終わります、生き残ってしまった者の罪悪感からか、「仕方がない」という言葉に逆ギレしているような生々しさを感じてしまいました。

(おわり)

## 『生と死と』

自分は今、生きている。そして明日も生きている。その前提で生きている。毎日何の根拠もなく、そう信じている。この小説を読みながら、ふとそのことを思い出した。

なぜ努力するか。将来の自分の存在を信じているからだ。なぜ傷つくか。自分の尊厳を保てないからだ。「今日もいる。明日もいる」このことが生きる条件になっている、そんな気がする。

しかし、夏子のように死は突然やってくる。そのことはなかなか我が事として受け止められない。心の防御として、いつも死を意識しておく方が良いのかも知れないが、それが難しい。

例えば、他者に自分の願望を押し付ける自己欺瞞は、明日相手が死んでしまうならすぐに止めることができるかも知れない。ある人から「子どもが勉強が苦手なんて、悩みのうちに入らない。小児癌で明日亡くなるかも知れないという母を知っている。子どもが元気だった頃勉強の事であれこれやかましく言っていたことを母は大変悔やまれている。」と言われた事がある。確かにそうだ。消えるかも知れない小さな命を前に、残される者は罪悪感と無力感に苛まれるに違いない。

小林麻央さんの生前、私はブログを時々訪問していた。最後の記事『オレンジジュース』。今日明日の命という状況でもなお母が絞ってくれるオレンジジュースを心待ちにしている、麻央さんのありのままの感情の吐露に癒される。そして同時に心が苦しくなり泣けてくる。「大切な人を失った経験がない自分は幸せなのかも知れない。でもいざその時になって、自分はどうなってしまうのだろうか？」という不安が頭をよぎる。

私はいつも出来事を死と天秤にかける事は今のところ大変難しい。生への執着がかなり強い状態らしい。だから、村岡の気持ちに寄り添うことさえもなかなかままならず、結局のところこの小説に入り込むことが難しかった。けれど、夏子の死から 21 年経ってもなお夏子の死が気の毒に思えて仕方ない村岡のことは心に強く印象付いた。自分の気持ちの不安よりもまず相手の無念を想える村岡は心の優しい人だと思う。『愛と死』。その人を愛し、自分もまた愛された記憶は、死の恐怖をいくらか和らげてくれるものなのだろうか。

それにしても、また振り出しに戻る。

ああ、死がこわい。

こんなにも生に執着する自分が怖い。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォー-belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>



## 『 死の向こう側 』

私は、思い違いをしていた。

「愛」と「死」はベクトルが真逆だと思っていた。だが、村岡の「これは二十一年前の話である。」との言葉に私は打ちのめされた。死が二人を引き裂いたのではなく、夏子の死から「愛」が始まったのだ。

それまでの村岡と夏子の仲睦まじい面映ゆい感情は、まだ自分の為に相手を求める「恋」だったのだろう。しかし、相手を永遠に失う理不尽さを経て、愛に昇華する想いもあるのではないか。村岡は、「生きているものは死んだ者に対してあまりに無力なのを残念に思う。」との想いのもと、「生きている人間の為に働く。」と宣言する。それは、夏子を奪った自然に対して復讐を果たすため、村岡なりの愛し方なのだ。恋のままだと、恋人の死に絶望することしかできずに後追い自殺をするかもしれない。だがそれは、残された人間の自己満足であり、亡くなった人間への感情もすべて消えてしまう。

自らが生きて相手を想い続けることは想像以上に難しいと思う。だからこそ、「これは二十一年前の話である。」との言葉が重い。

お互いが「生」の中で育む愛ももちろん存在するだろうが、「死」を乗り越えた愛は壮絶だ。「恋」と「愛」が並列なのではなく、「愛」とベクトルが同じなのは「死」ではないかと涙を流しながらこの小説を読んだ私は辿り着いた。

わずか一年二か月の新婚生活と二つの命を残し、戦場に散った亡き夫に対して、戦後七十年を経てもなお、夫に恋文を書き続ける九十四歳の女性がいる。

『 貴方(あなた)！！ 貴方！！ 貴方！！ 』

何回も呼んでみたいのです。

貴方と呼ぶと貴方と過ごした一年二か月の新婚生活に戻るのです。

貴方のぬくもりが蘇ってきます。有難う！有難う！』

『 貴方が買ってきて下さったショール、今も大切にしています。 』

私の肩にやさしくかけて、ギュッと抱きしめてくれましたね。

体がポツと熱くなりました。貴方！有難う！』

<週刊女性プライム 人間ドキュメント 大楠ツチエさん から引用 >

今も、夫の話題になると笑顔がこぼれるらしい。こんな「愛」を見せられたら「死」すら霞んでしまう。愛って生半可なものじゃないと実感しつつ、また泣いた。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

## 『見ることと描くこと』

私は、この小説を読んで、印象派の画家ルノアールとモデルの話を思い出した。ルノアールは近所のある少女をモデルにして、絵を描いた。彼女が少女でなくなった後も、晩年まで何作も彼女をモデルにして絵を描いたという。

モデルと画家の間にスパークするものがなければ、作品は生命を得ない。

それには、「見る」ということが、とても大切なのだそうだ。

ルノアールにとっては、見ることこそが、描くことだった。

軽演劇で活躍する夏子を、熱心に見ている。まるで自分のことのように、心配しながら見守りつつ、観客に見られている夏子の印象まで、細かく追いかけている。

たとえば、それは、モデルを前に、画家が絵を描きながら、その絵が、自分自身に何を訴え、また、この絵を見た、第三者や批評家がどういう印象を与えるのかを思い、また、そのモデルを実物で見た、第三者や批評家が、モデルと、絵とを比べて、画家の見つめたもの確かさを思うか、どうか？ 見ることと描くことのこんな格闘が、描かれたモデルに生命を吹き込む。

だから、武者先生に描かれた夏子は、今も読者の前で生き生きと宙返りしている

(引用はじめ)

あなたの意識していない、存外あなたは、意識しているかとも思いますが、美しさは、私が見たかったものであり、見せたかったものなのです。私はいつのまにか、あの劇を自分が書いたもののような気がし、また興行師のような気になっていたようです。

(引用おわり)

夏子は、兄の野々村が、村岡を尊敬しているから好きになった。また、村岡も、野々村をライバルとして認めているから、その妹である夏子を好きになった。夏子がモデルで、画家が村岡、第三者たる批評家は、野々村である。

三者の関係性の中で、夏子は、強い生命を得た。彼女の唐突な死は、読者に強い衝撃を与えるが、生前の活潑な生命の面影は、今もなお、息づいているようだ。

ルノワールの見つめたモデルの生命が、彼らの死の後もなお、力にあふれているように。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

課題図書はこちらでお求めください [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)